

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑭

本連載で過去に紹介したことがある今治市の県内最大の前方後円墳「相の谷1号墳」からは2面の銅鏡が出土している。

1面は禽獸画象鏡(きんじゅうがぞうきょう)。径12cm。大きさがぞうきょう。

今治で出土 2面の銅鏡



●上：画象鏡 ●下：獣紋鏡（古墳時代前期後半）=ともに相の谷1号墳出土、県歴史文化博物館保管。テーマ展「今治平野の古墳文化」（～11月26日）で展示中

鳥モチーフ死生観鏡を表す？

・6センチ) という中国後漢時代後期(2世紀後半)のもとのある。鳥像と獸像をモチーフにしており、約40片の破片で出土した。どの段

文字の銘文を判読することが可能になるとともに獸像の表現が明確になった。また、復元にあたっては割れていた破片を接合し、欠損

獸像の表現では、鳥像の羽根、くちばし、頭部、脚部と獸像の脚部の表現がよ

り明確となつた。

もう1面は、鼈龍鏡(だ

のモチーフである4体の獸の形が明確となつた。それには羽状の表現が認められ、くちばしと思われる表現が3体で確認できるところ、これら4体の獸は「鳥」を表現したものと推察され、鼈龍が表現されていないことから「獸紋鏡」という名称が適当であろう。

「鳥」をモチーフにした2面の銅鏡を、当時の人々はどのように理解していたかは判然としないが、魂をあの世に運ぶなど当時の死生観を表したものではないかと考えている。

（専門学芸員・富田尚夫）

△随时掲載します△

している部分は樹脂で修復した。銘文については従来「作竟真大」が判読されていたが、「氏」と「山」が新たに判読できた。その結果、「（龍？）氏作竟真大（巧上有）山（人）」という漢詩が銘文となっている可能性が浮かび上がってきた。

鏡の銘文は七言句をつなげるものが多く、類例から「（龍？）氏作竟真大巧上有山人不知老」の一部を省略したものと考えられる。

この鏡は中国で製作された画紋帶神獸鏡といふと呼ばれる倭鏡(国産の鏡)である。鼈龍とは、ワニをモチーフとした獸とされており、この鏡は中國で製作された鏡をモデルに製作されたと考へられている。資料は、石櫛のほぼ中央で、背面(紋様のある面)を上にした状態で、完形で出土している。しかし、調査時には2次的移動を想定しており、副葬された位置を保っていないと思われる。